

阿蘇山

概 況

中岳第一火口の南側火口壁の温度は、21 日に 323 を観測するなど依然高い状態で、火口内は全面湯だまりが続いています。

孤立型微動が 5 日から増加し、15 日の 340 回をピークにその後は徐々に減少して、下旬には数十回程度で推移しました。特に、この活動に伴う表面現象に変化はありませでした。

噴煙活動の状況

噴煙は月を通して白色・少量で、噴煙の最高高度は 14 日の 400m（7 月 500m）でした（図 6）。

地震活動の状況

8 月には孤立型微動を 4,413 回（7 月 37 回）観測しました。月の発生回数が 4,000 回を超えたのは、平成 8 年 3 月（4,829 回）以来です。最大振幅は 11 日 17 時 36 分の 16.1 $\mu\text{m/s}$ （7 月 9.8 $\mu\text{m/s}$ ）でした（図 7、図 8）。

孤立型微動は、5 日から増加し、15 日には 340 回を観測した後、徐々に減少し下旬には数十回程度となりました。日の発生回数が 300 回を超えたのは平成 2 年 7 月 2 日（367 回）以来です。

A 型地震の発生回数は 19 回（7 月 21 回）で、主に中岳第一火口の直下付近で発生しました（図 9、図 15）。B 型地震の発生回数は 135 回（7 月 217 回）でやや多い状態が続いています（図 4、図 11）。

期間中、火山性連続微動はありませんでした（図 14）。

地殻変動活動の状況

GPS による地殻変動観測では、草千里 - 砂千里浜、草千里 - 仙酔峡、砂千里浜 - 仙酔峡の各観測点間の基線長に変化は見られませんでした（図 16）。

現地観測の状況

火口底は全面湯だまりの状態が続いています。

南側火口壁の温度は、依然 300 程度で高い状態を保っています（図 5、図 13）。

湯だまりの温度は、7 月に引き続き変化はなく、最高は、1 日と 14 日の 60 でした（図 13）。噴煙は白色で青白色のガスも観測しました。

（温度測定は、赤外放射温度計による）

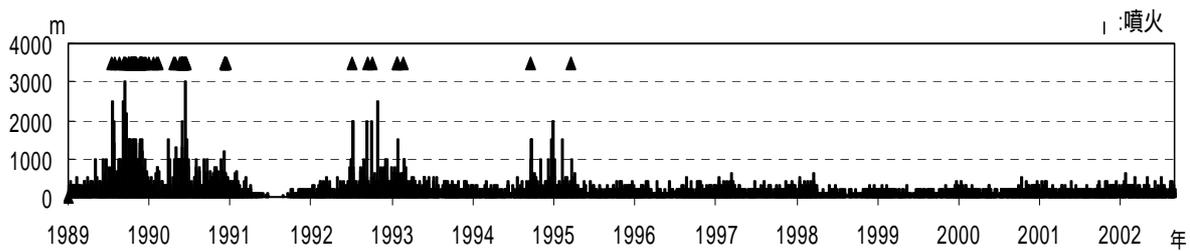


図1 日別最高噴煙高度(1989年1月～2002年8月)

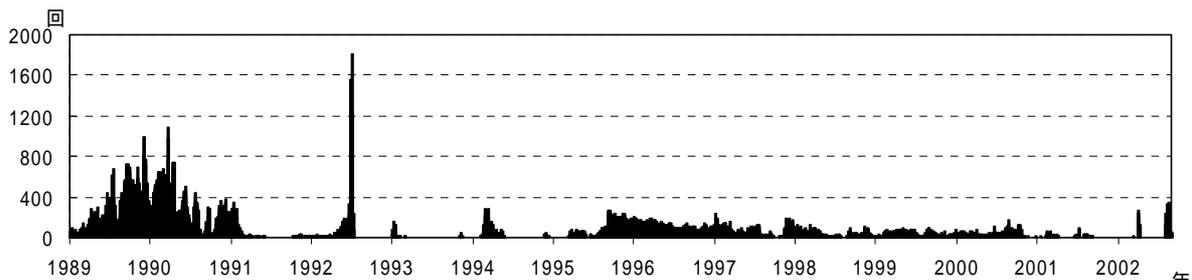


図2 孤立型微動日別回数(1989年1月～2002年8月)

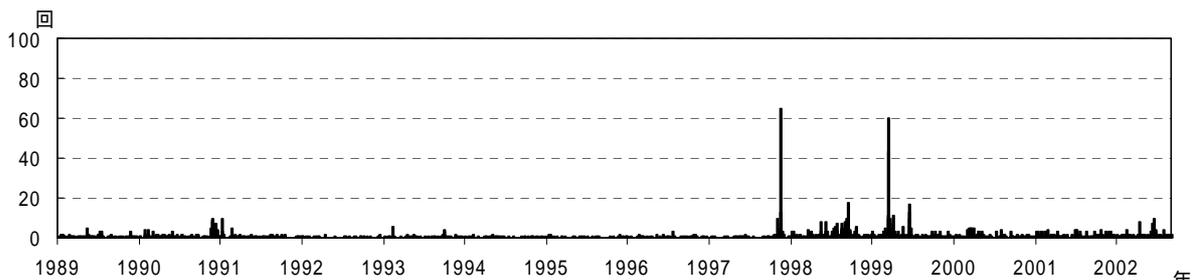


図3 A型地震日別回数(1989年1月～2002年8月)

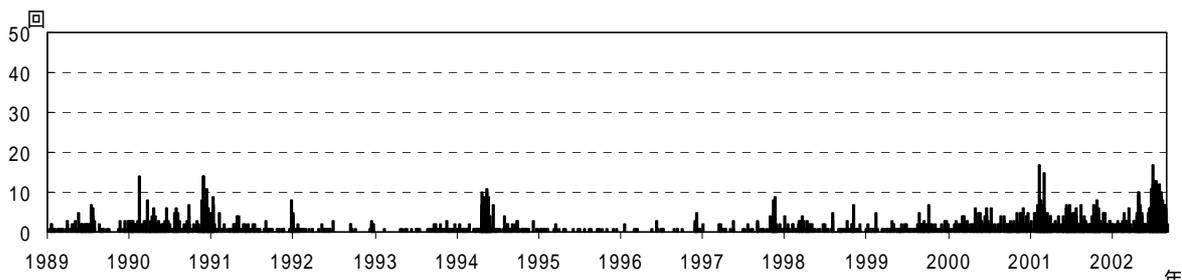


図4 B型地震日別回数(1989年1月～2002年8月)

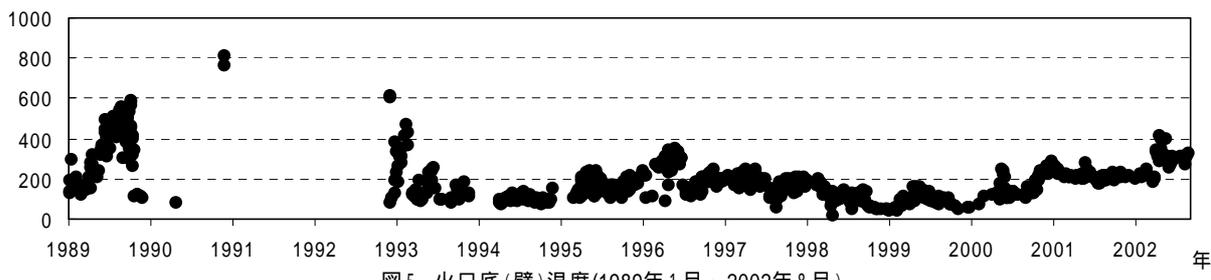


図5 火口底(壁)温度(1989年1月～2002年8月)

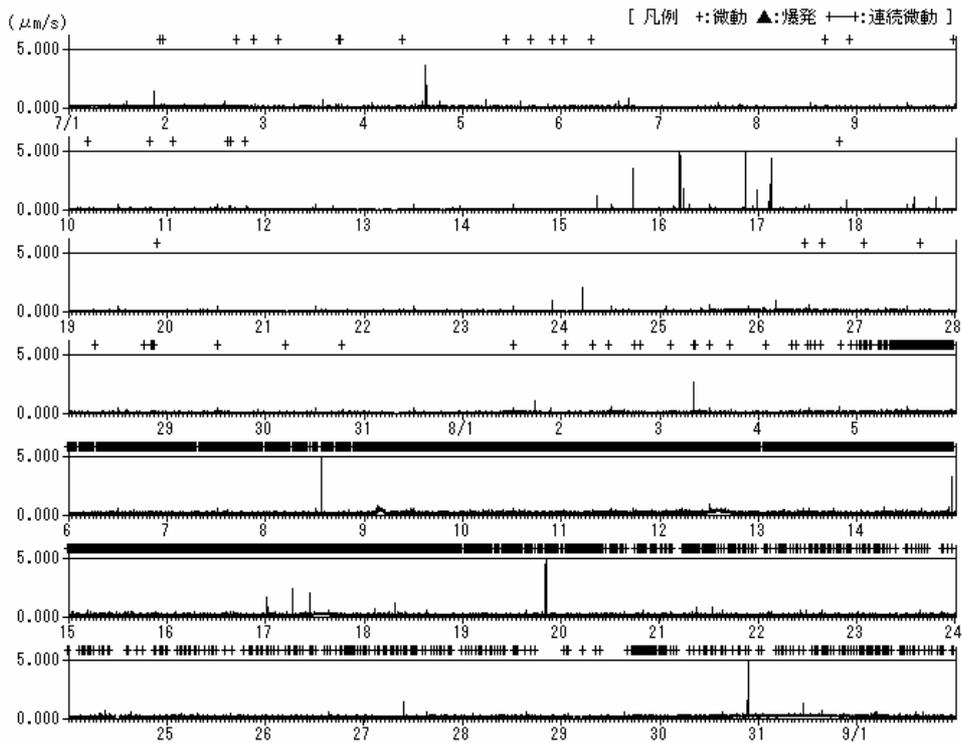


図 14 1 分間平均振幅の時間変化 (A 点 N-S) (2002 年 7 月 1 日 ~ 8 月 31 日)

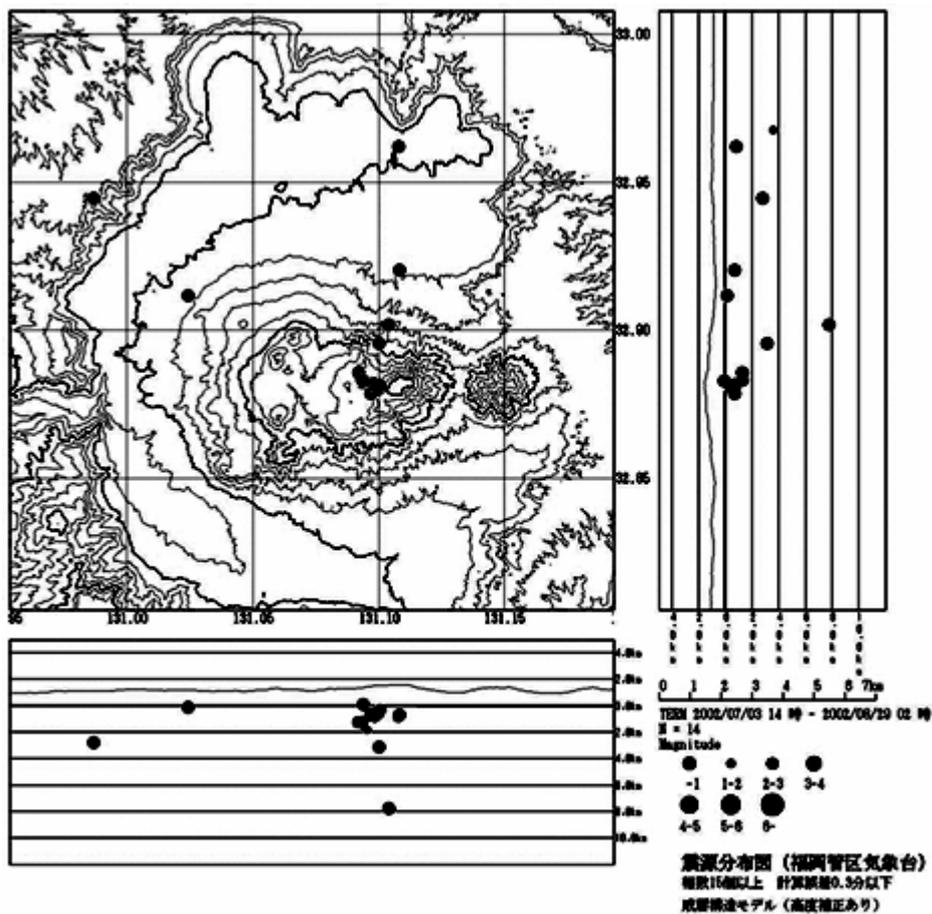
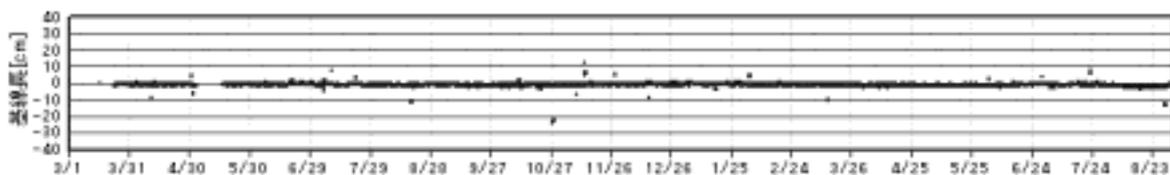
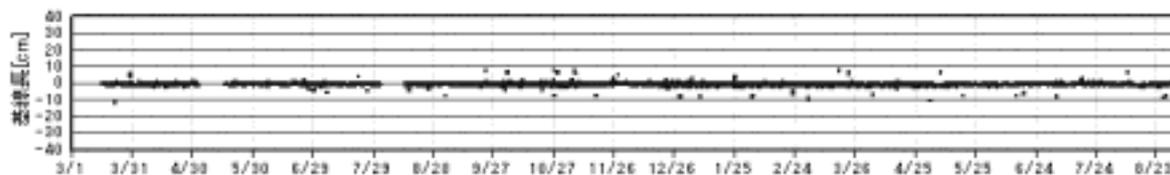


図 15 震源分布図 (2002 年 7 月 1 日 ~ 2002 年 8 月 31 日)
 (気象庁及び京都大学地球熱学研究施設阿蘇火山研究センターのデータを使用)

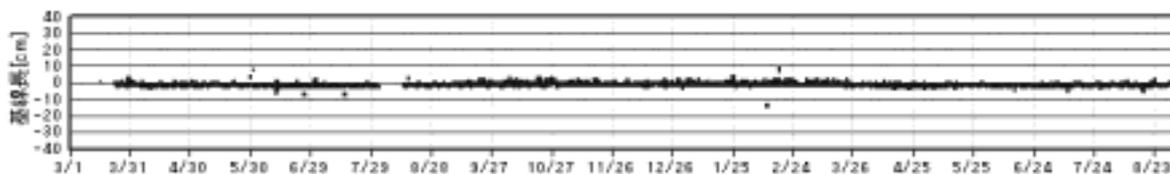
阿蘇山



草千里 - 砂千里浜の基線長（2001 年 3 月 15 日～2002 年 8 月 31 日）

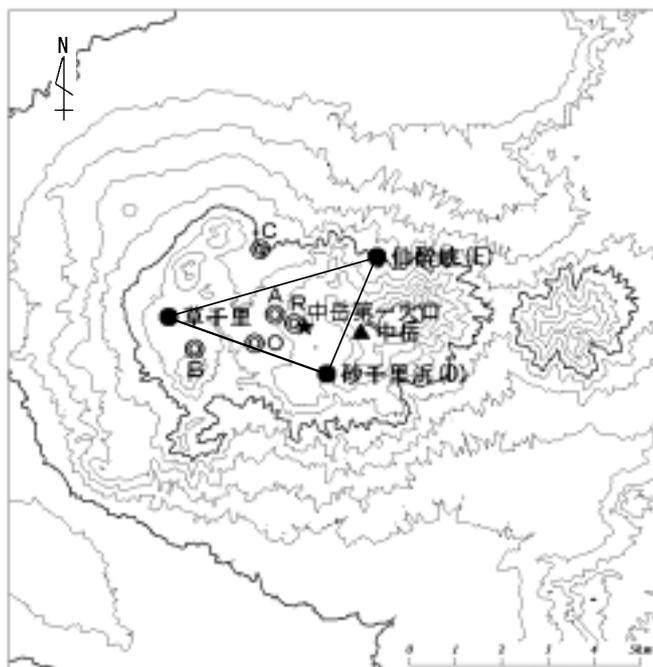


草千里 - 仙酔峡の基線長（2001 年 3 月 15 日～2002 年 8 月 31 日）



砂千里浜 - 仙酔峡の基線長（2001 年 3 月 15 日～2002 年 8 月 31 日）

図 16 GPS による基線長



- | |
|--|
| 気象庁観測点
遠望カメラ 1 点（草千里）
地震計 6 点（A～E，O）
空振計 3 点（E，O，R）
傾斜計 1 点（O）
GPS 3 点（ ） |
|--|

図 17 観測点配置図